

論 文

地域学の新しい試み・序論
—山陰・北浦を対象にして—

多賀直恒*1

キーワード：地域誌、民俗学、伝統文化、方言、文化財、保存技術

1 住まいと暮らしの生活の中から

何もないところに、一つの形を作り出すことは至難のことである。新しい地域学に挑もうということである。先学の数えきれない成果を土台にしながら新しい積み木をしていくのが良いと思う。こう考えると心が不思議に落ち着く。

さて、何から手を付けようか。当面、現在の視点や課題を挙げて大きな山に登り始めよう。まだまだ多くの問題点が残されていることを承知で仕事に取り掛かったのが2年前である。発想の原点は、網野義彦の「日本史を読み直そう」⁷⁾であった。日本の国の歴史や日本文化を考えていて書店でふとこの本に出合った。凄い、眼から鱗が落ちたという心境であった。次に考古学者の森浩一⁹⁾、木簡の東野浩之²⁾である。

歴史学や考古学を専門としない者にとって新鮮な響きでこれらの著作に当たった。網野義彦・森浩一両氏の歴史の見方を学んでこれからの試みに挑戦する所存である。「地域学の新しい試み—萩学・北浦学・山陰学—(仮)」良い命名がない。要するに山口県の日本海側を対象に、歴史と文化を調べ考えてみようという試みである。発想の原点である森浩一「地域学のすすめ」を契機にいくつかの日本の地域から始める。2013年10月21日萩の大学研究室にて発想した。

1) 地域に向けての提言 地域学を学び育てることの意味を考える。特に山陰・北浦で育った経験を生かし、高齢化していく日本の状況を考慮して、将来地域のリーダーとして活躍する人材の育成、福祉の立場から地域で生活の場を創造できる人材の育成を目指したい。

巨大化し集中化し均一化していく日本の社会構造の中で、今地域に求められている再生の道は、ダウンサイズ化し、分散し、個別化していく成熟社会に求められる新たな視点に立って人間一人一人がライフステージにあった生活の場を自覚して模索し探り出して進むことが必要であると考えます。

2) 地域の歴史の顕在化

日本は、ほんの150年前には、各地方・地方でそれぞれの地域の風習や伝統を有して地方の訛りのある言葉や食を喋って、住まいの形も生活習慣も多様でそれぞれ異なるものを有していたが、最近それが忘れ去られ捨て去られている。青森県と熊本県で話している言葉や食べている食事は殆ど変わらない。情報化や流通機構の発達により世の中は一律化され均一化されてきた。言葉も習慣も標準化され均一化され地方の言葉や訛りの面白さや秘められた歴史がなくなり失われて、生活様式も食べ物も国際化の名のもとに一律化されていく傾向にある。

ここで今、考えなければならないことは、地域に住み地域で暮らし歴史や伝統や習慣やしきたりを重んじ大きな時代の流れに巻き込まれずに地域の伝統的な生き様を調査し再発見して、その優れた地域文化を守り後世に伝承していく継承者・子孫を育てる地域社会の仕組みを構築することが喫緊の課題である。

そこで地域の緊急の課題に対して、地域の伝統と文化を再生するために地域にある史料や古文書などを紐解いて地域史を地域に住まい生活している人々と構成しようという試みを考えた。この地域に住む老若男女

*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

や年齢を問わず職業を問わず地域の伝統文化や歴史遺産に関心を集め地域の宝を保持し伝承していく環境を整える仕組みを構築していくことを推進して行こうと考えるのである。

3) 古代史・考古学から地域を見る 以下で示すが山口県角島に関する事項を抽出すると、木簡とは、一応長方形の木片に文字の書かれたものが木簡ということになっているが、東野浩之によると学会でもはっきりした定義はまだ結論が出ていないという。木簡に対する関心は、専門家の間では言うに及ばず一般の人たちにもかなり高いようである。今日では古代史研究に不可欠な重要資料となっている。

木簡の解読を通して、古代人の日常生活の様々な姿を浮かび上がらせている。木簡の歴史は新しい。昭和36（1964）年に、奈良の平城宮跡で奈良時代の木簡が発見されて以来である。

古代史は、日本書紀を始めとする政府編纂の正史と、正倉院や古寺に伝わる古文書をもとに組み立てられてきた。これには多くの問題があるし限界がある。木簡の出土は、このような史料の問題や空白を埋める意義を持った。歴史資料として、木簡の意義は大きい。

東野浩之²⁾は、山陰北浦に関する情報として、志摩国からの生ワカメの荷札に、「調と贄」という記述の中で、以下のような具体例を木簡から指摘されている。

「贄」は生贄という意味もあるように、一般には神などへ供える食物を指すが、この場合は、天皇の食物として諸国から献上される食品の意味である。贄の制度は、古代の租庸調などに関連した制度の一つと考えられるが、その贄に付けられた荷札も、平城宮跡を中心に出土例が多い。ワカメに関係した例がある。その記録に次の一文がある。

「長門国豊浦郡都濃嶋所出和歌 海藻 天平十八年三月廿九日」と記述されている。ここに出てくる都濃嶋・角島は、今も山口県の日本海側に浮かぶ角島である。このワカメは、特産品だったらしく、「万葉集」にも詠われている。

角島の 瀬戸のワカメは 人のむた 荒かりしかど
我とは和海藻（巻十六、三八七一）

その解釈は「本土との間の瀬戸にできるワカメは、他人には荒かったけれど、自分には柔らかだ」という民謡風の恋歌である。

「長門国大津郡中南男作物海藻陸斤二連 天平九年十一月」これも一例である。

2 地域学の狙いと方法・実践

地域学とは何か。地域学とは、それぞれの「まとまった空間」の中の住人を主人公として歴史的な展開を見ようとするものである。「まとまった空間」とは、歴史的地域と言ってもよい。よくありがちな日本歴史では、様々な地域の果たした役割とか特色が中央に対して重く、地方として薄れてしまい、力量間の乏しい歴史になりがちである。地方史では勇気がわかず、その意味では地域史を総合した時に本当の日本史が語られると思う。森浩一⁵⁾によると蝦夷と隼人の域史は、日本列島の北端と西端は僻地と考えられ奈良・大和からは遠い。地域史の役割としては、大和中心の日本の国の形成に対して、地域にも独立した民族があった。

1) 地域学習の実践 古典にみられる地域の重視 木簡から窺える地域の姿を顕在化して存在意義を考える。われわれの住んでいる地域、我々の生活している地域のことをもう少し知ろうという発想から地域学が生まれた。地域には素晴らしい自然があり、そこにはいろいろの生物が育ち、その中で我々も生きて生活している。自然の環境の中で空気を吸い、水を飲み、食物を食べて生きてきた。人間は自然の中で生活を営みうまく生命を保ってきた。住まいを造り建物を建てて生活してきた。その生活の技術は先人がいろいろ工夫して発達してきた。

狩猟、牧畜、農業、漁業、林業、鉱山、百姓³⁾など色々な営みをして生活してきた。色々の道具を工夫し技術を生み自然や外敵の害を防ぎ生きてきた。歴史と伝統と文化を営み、地域固有のライフスタイルを築い

てきた。今我々が住んでいるこの地域は、一体どんな地域であるのかを考えてみよう。実際に、今住んでいるこの場所の歴史や文化の原資料や生の資料に触れてその実態を知ることができたら素晴らしい。先ず、最近の地域の動きを観察しよう。

2) 小中学校「地域学」の事例

小中学校に「地域学」の事例を見る。奈良県における事例としては、郷土なら学など「地域学の狙い」は、実際に具体例を示すと分かりやすい。

- i 故郷の名を冠した「地域学」を導入する小中学校が増えている。
- ii 総合的な学習の時間を使って地域の歴史や文化を見つめ直し、将来の郷土の担い手としての自覚を促す狙いがある。
- iii 少子化で学校の統合廃合が進む中で地域の一体感を高める効果も期待されている。

奈良市の事例1 「誇りに思える」奈良を考える、そのためには何をするか、何から始めるか。

“薬師寺と唐招提寺について発表します。緊張した面持ちの小学5年生三人がパソコンのマウスを操作しながら、寺の成り立ちや建築の造りを代わる代わる説明する。「もう少しゆっくりと話したほうがええなあ」等々の榎本克之教諭が声をかけると児童が頷いた。

奈良市郊外にあるある小中一貫校、私立田原小中学校で二月上旬にあった「郷土なら学」の授業である。児童は翌週に開かれる研究発表会に備え、資料作りやリハーサルに追われていた。5年生の発表テーマは「奈良の世界遺産」を三人組で東大寺などの建造物を調べ、実際に訪問し神社仏閣の関係者に建物の特徴を尋ねたり、外国人観光客に古都の印象をアンケート調査したりした結果などを、1年がかりで纏めた。

唐招提寺を調べた塩田瑞李さん(11)は「1千年以上も建物を大事に守ってきたのはすごい。奈良に住んでいるのが誇りに思えるようになった。」と話す。

郷土なら科は2005年に導入。「奈良について聞かれても説明できない子供が多い」国際的な観光文化都市

を標榜する奈良市が、こうした状況に危機感を抱き小中一貫のパイロット校であるモデル授業に取り組むことに決めた。同科で学ぶのは5年生からで、総合的な学習の時間のうち、週に1時間程度を充てる。歴史や伝統文化に留まらず、介護ボランティアや観光・宿泊施設での就業体験も盛り込んだカリキュラムは多彩だ。

小中一貫で地域の福祉や産業の現状までじっくり学ぶことで、「地域の担い手としての自覚を持たせる狙いがある」(榎本教諭)。地元で遺跡発掘や文化財保護にかかわる仕事に就きたいと考える生徒も出てきた。

高松市の事例2 高松市も二年後、市中心部にある小学校三校を統合してつくる新設校での総合学習で、地域の歴史や文化を学ぶ「高松学習」(仮称)を始める。高松市教育委員会は「郷土を誇りに思う子を育て、大都市への人材流出に歯止めをかけたい」と話す。「人材繋ぎ止め」何れ全小学校で同じような授業始める考えだ。少子化に伴う学校の統廃合も地域学の導入を促している

京都市の事例3 昨春、五つの中学校が統合して発足した京都市立下京中学校(京都市下京区)は、地域の一体感を高める目的で「京都学」を新教材にした。広大な校区では、地域ごとに特徴も異なる。「生徒が住民と一緒に京都の文化を知ることを通じて、校区が一緒に纏まりやすくなる」と柴原弘志校長は言う。

総合学習をすべて「京都学」にあてるほか、理科など一般教科でも京都を題材にし、年間100から143時間を費やす。住民や商店主でつくる「下京中ささえ隊」に協力してもらい、全校生徒での浴衣の着付けや祇園祭での山鉦引き、高瀬川での友禅流しなど伝統文化に親しむ仕組みだ。柴原校長は「地元の支えがなければ授業は成り立たない。住民と接する中で、生徒は自分が地域の一員だという意識が身に付いていく」と期待している。

福井市の事例4 学校だけでなく、地域のコミュニティーでも郷土の歴史や文化を子供たちに学んでもらおうという動きは盛んになっている。「学外での動き活

発」 福井市の財団法人「歴史のみえるまちづくり協会」は1月、同市内の小学生約20人集めて幕末に活躍した郷土の偉人について調べる学習会を開いた。足跡を知ることによって郷土の歴史への関心を高める狙いで、クイズを解いていく形式にする児童が飽きないような工夫をした。

家族の取組みも登場。兵庫県南あわじ市では、昨年12月地元自治会などが親子を対象にした歴史学習会を開いた。古事記や日本書紀にも記されている淡路島の歴史を、神話や伝説を交えながら紹介した。こうした学習会を開くのは二回目で、主催団体の担当者は「今後も定期的に取り組みたい」と話していた。

3) 各地の地域学を見よう 既に幾つかの地域でそれぞれの地域の立場や要望や組織で類似の試みが行われている。地域学の主体はあくまでも地域住民であり、住民の発想で企画し実行することが原則である。誰かがという依存意識ではダメだ。幾つかの事例から、具体的に、地域学の母体は、狙い・趣旨を具体的な自薦活動により住民とのコミュニケーションを活用して実行する。

i 富士山学 静岡県富士宮市では、全小中学校で「郷土愛」を養うため、2002年から総合学習として「富士山学」を実施し、中学校や地域住民が共同して行う地域学習によってコミュニティーも活発になった。地域の魅力を発見し地域の発展に繋げるという。

ii 会津学 福島県美島町では、聞き書き雑誌「会津学」を年1回発行している。次世代に生きる子供がここで生きる手引きにと、地域に思い入れがある。専門的でなく自分の足で調べる、民俗学者の助言を得て、取材経験のない「聞き書きグループ」が当たっている。

「古臭い」と捨てられてきた年中行事や風習、手仕事、農法。中には「実は凄い価値があるはず」と確信に近い思いがあった。

iii 宮島学 「どうすれば地域貢献ができるか」広島大学人間文化学部の学部長が悩んだ挙句、地元の世界遺産で「宮島学」の設置を思いついた。「未だ知られてい

ない宮島の情報を発信すれば地域振興につながる、それも大学教育の延長線上で活動を展開できると考えた。宮島学が「誰も想像がつかない取組」として文科省支援の特別プロジェクトに選定され、非正規授業としてスタートした。授業とは別に「島のひととの交流を進めよう」と学外で続けているのが公開講座である。

iv 鳥取学 発想は地域観光を通じて環境意識を高めるエコツーリズムに始まり、地元の人が地域情報を知らないと他の観光地と勝負にならないし、子供たちにも地域のことを知って貰いたいということで並行して地域学に取り組みもうという動きになった。地域ガイドの人材育成や環境がテーマの環境運動にも波及した。

エリア情報講習会やテキスト作成・地域学検定を実施。
v 木曾学 長野県木曾町長が、山村の価値を見直す運動を進める木曾学研究所を立ち上げた。「このままでは日本の山村はダメになっていく、地域のモデルになるような街づくりをしたかった」と。イタリアのポローニャを参考にして「自分たちの土地の歴史や文化を研究するだけでは町の明日は期待できない。木曾学を農山村の改革につなげないと。木曾漆器の復活、創作家具の制作にも伝統の漆器に光を当てる、地域に根差す、文化や芸術や人材を活用して都市・地域の再生を目指そうと考える。

4) 九州という思想 その考え方を山陰地域に当てはめるとどうなるか。このプロジェクトの狙いは、「九州という思想」「東北学」などに倣って「山陰・北浦・萩を中心に地域学が成り立つか」を考えてみよう。

地域研究の新たな仕掛けに、比較社会文化論や人文社会科学の可能性を得たいと考える。探検と単なる旅とはどう違うのか？新しいものを発見する可能性を帯びている。しかし、ここでは人文社会科学的な見地から地域を見直しその中から現れている何かを求めること、そこには中央、一つの日本とは違う個性を持った地域があると信じる。

- i 地域のグループ運動とサークル村
- ii 吉田松陰の思想を一般に説く

- iii 維新からを考える／その後の影響
- iv 山陰北浦という思想は存在するか

この運動の動きとその狙いは、萩の歴史性とその地域的な役割を踏まえたうえで、情報の起点・中央から眺められる「地方」としての萩ではなく、韓国・中国をはじめとした近隣諸国と自在に交通していくネットワークとして「萩」を再構築することである。

具体的に言えば、山口（周防・長門）と萩という歴史性と地域性を踏まえたうえで中央から眺められる地方としての山口—萩—山陰・北浦ではなく、東アジア周辺をはじめとした広域世界と自在に交通していくネットワークとしてこの地域を再構成する思想を構成することが狙いである。具体的には、

- i 近代以降山口に特化した特色ある思想や
- ii 日本の歴史的営為を山口から再考して
- iii 東アジア地域とこれまでどのように交流し
- iv 大学における人文科学社会科学の教育研究を支えている学問的基礎を問い直している。

こうした活動が単なる地域主義、村越しと並んで大学越しになってしまうのでは意味がない。今全国の大学では、個別的な競争力をうたい文句にした研究・教育が氾濫し、ローカリズムとグローバリズムの接続が至る所で語られているが、本大学が「萩」という思想を掲げること自体、退屈で硬直化した光景を反復してしまう危険はないだろうか。

そもそも、「山陰」・「北浦」・「萩」という思想などあるだろうか。「そんなものはない」という反応を予測しながら、では、なぜ我々の周辺には「萩」独自の風土や特性があるかのように見せかける言説があるのか。多くの人がそのイメージをありふれたように踏襲してしまっているのか。土の中に埋まっている「萩」という思想を発掘するのではなく、まだ始まってすらいないう「萩」を「構成」しつつ「解体」すること。我々は、そんな積み木遊びのようなし掛けの中で、自然科学・人文科学・社会科学の可能性を探りたいと考えている。萩という街、人口5万の都市、そこに何があるのか、

そこを探索する。

3 地域の歴史と伝統文化

萩の街の伝統文化を模索するための例示と具体的な歴史を検索し方法論を学ぶための試論である。

1) 伝統文化の構成と歴史 地域研究の新たな仕掛けに萩と言う思想そしてその歴史を、「日本の歴史を読み直す」に倣い⁷⁾、従来の日本歴史とは違う立場で、日本という国、「国の始まり 日本文化 日本人」とは古代における日本はどんな状況にあったのかを見直して、現在の地域の状況を歴史的に実証的に調査して再構成する新たな試みである。

古事記・日本書紀に示された本流の日本史とは異なった、大和朝廷と九州から北海道までの状況を地域の歴史と生活風土から問い直す。

木簡の発見による古代史の新たな事実に基づいた実証歴史学は何を語るのか。改めて歴史をどのように読み直し再構成できるのかを考える。そこには地域の重要性和古い時代ほど地域性がありそれが地域のアイデンティティーのあらゆる発想の原点であった。

そのエッセンスである日本が農業中心であったというイメージはなぜつくられたのか。商工業者や芸能民はどうして軽視されるようになったのか。現代社会の祖形を形造った文明史的大転換期・中世は。そこに新しい光を当て農村を中心とした均質な日本社会に疑義を呈してきた網野善彦が、貨幣経済、階級と差別、権力と信仰、女性の地位、多様な民族社会に対する文字・資料の在り様など、日本中世の事実とその多様な横顔を生き生きと平明に語った事実を受けて、これを地域学の礎に発展させる試みを始める。彼は、先ず百姓の原義を問うた。

2) 伝統文化の展望 経済学で考える「伝統文化の視点」中島隆信¹⁰⁾（慶應義塾大学教授）で、示された重要な三つのポイントは、

- i 伝統文化に文化性・競争性・商業性の3要素
- ii 3要素をどう組み合わせるかで特徴が形成

iii 伝統という名の過去の遺産だけではじり貧

日本の伝統的な文化がどのように成立し、展開し、衰退していくかを、現象論的に推移していく状況を観察しながら今後の在り方をイメージする。

2013年4月2日に、歌舞伎座のリニューアルオープンがあった。将棋ファンにとっては、4月は春の名人戦の季節である。大相撲は今春、公益法人認定の準備に向けて待たなしの状況を迎えている。

長い歴史を持つ伝統文化は「十八番」「勇み足」「成金」などが日常用語になっていることからわかるように、日本人の生活に深く浸透している。一方、人口減少に伴う国内市場縮小が避けられない中で、伝統文化といえども過去の遺産に頼るだけで生き残るのは困難な時代となった。

歴史的経過と現状及び今後の展望を見ると、

実用性：どのような伝統文化であっても、その始まりは、実用的な技能として意義を持っていたと考えられる。生け花は、仏壇を飾るという実用性があったし、剣道や柔道などの武道は、戦場で勝つための手段であった、相撲は寺社や朝廷で奉納する神事だった。

文化性：ところが、科学の進歩につれて、これらの技法の実用性は薄れ存続の危機に立たされる。そこで考え出されたのが、格調高い文化性を備えて生き残るという方法であった。それなりの仕掛けが必要である。その一つは、文化性を高めるには、精神性の加味である。具体的には、技を身に着けるための稽古に、精神統一や人間修養という新たな目的を付加するのである。

その際年功が特別な意味を持つ。格調の高さが簡単に身につけてしまっては重みに欠けるからである。師匠のもとで何年も修業をした結果、免許皆伝や段位を授かるというプロセスが重視されるのである。そこに「カリスマ性」と「神秘性」が加わると、文化はさらに重みを増してくる。横綱土俵入り、宗教的儀式の持つ神聖さを通じて浸透させる。

しかし、文化活動が格調の高さだけで生き残ることはできない。若者を引き付ける魅力が必要である。な

ぜなら、次世代の若者が入門しなければ伝統の継承は難しくなる。

実際の家元制や世襲制は、権威付けにはなるものの実力のある若者にとっては参入障壁になる。そして型や流儀にのっとりた稽古は、第三者による客観的評価を難しくすることから年功を助長する働きをする。

競争性：そこで文化活動の中には新規参入を促すために競争性を高める例も出てくる。

例えば、将棋の名人は、1937年にそれまでの推薦による終身制から現在の実力勝負方式に切り替えられた。また剣道は、江戸後期に竹刀と防具が開発されたことで、構えなどの形式美一辺倒から抜け出し幕末の隆盛期に繋がった。

競争性を高めるという点では、柔道がその最たるものであろう。柔道は、明治期に加納治五郎が古来の柔術から「精力善用」「自他共栄」の精神を取り込むことによって生まれた。つまり単なるスポーツではなく精神を鍛えることも目的の一つとされた。

ところが、柔道を広く普及させるには、こうした精神性は部外者に分かりにくく、競技者拡大への障害となりかねない。そこで柔道が選んだのは、競争性重視の国際化戦略だった。その結果、1964年の東京五輪で正式種目となり、現在の世界の競技人口は900万に上るといわれる。

商業性：伝統文化が生き残るためには、商業性という視点も見逃せない。つまり見世物としての価値を向上させ、入場料を徴収する戦略である。これは文化性や競争性と必ずしも矛盾はしない。

それらの要素をどのように見世物としての価値に結びつけるかということである。例えば、歌舞伎は松竹株式会社の下で、襲名披露の巧みな演出やスーパー歌舞伎といった創意工夫を加え、メディアを通じた広報宣伝活動で商業性を高めることに成功した。

しかし、商業性を高めることの行き過ぎは文化性の後退に繋がることもある。

古典落語という伝統文化は聴衆を笑わせる技の披露

である。話の内容と使える道具は決まっているので、あとはそれをどう見せるか噺家の芸に掛っている。この笑いの世界に競争性を持ち込み、商業性を高めたのが吉本興業だろう。その経営戦略はどれだけ聴衆を笑わせたかでお笑い芸人を競わせ、勝者が生き残るというやり方である。これにより、お笑い芸人の活躍の場は大きく広がったが、落語を中心とする日本の伝統的な笑いの文化性は変質したと言えよう。

今後の展開：伝統文化には、経済学の視点から見ると、文化性、競争性、商業性の三つの要素が含まれている。そして、これらをどう組み合わせるかによって、それぞれの文化の特徴が形成される。

これからの時代に必要なことは、それぞれの伝統文化が明確な戦略を立てることである。伝統という過去の遺産に胡坐をかき、同じことを繰り返しているだけではジリ貧になる。

公益法人だからと言って、政府が手厚く保護してくれるという保証はない。文化性に磨きをかけて、さらなる差別化を図り、規模は小さいながら国内市場をがっちり守っていくか。

文化性を犠牲にしても競争性を高めて国際化を推し進めていく。日本の伝統文化に対する海外の理解者を増す工夫をするか。それぞれの文化のガバナンス手腕が問われている。

4 先験事例「東北学」

1) 東北学各論 東北5県の地域誌 相次ぎ創刊

東北から日本を見直す「東北学」を提唱する赤坂憲雄(東北芸術工科大学教授)の考えに賛同した有志が、「自らの足元を掘り起こそう」と地域誌を相次いで創刊した。宮城県の「仙台学」が先陣を切り、福島県の「会津学」、山形県の「村山学」、岩手県の「盛岡学」、青森県の「津軽学」と、秋田県を除く東北5県で出揃った。内容や形式は様々だが、各地域の文化、伝統、そして現状を見つめる熱意にあふれている。

赤坂は、東北文化研究センター長を務めており、セ

ンター発足直後の1999年に文化研究誌「東北学」を創刊した。さらに翌年には、聞き書きやルポなどに力点を置いた雑誌「別冊東北学」を発刊した。しかし、雑誌は東北全体を対象にしており、各地を万遍なく取り上げることは難しかった。そこで地域誌の創刊を呼びかけ、呼応したのがこの5誌である。

大震災から考える 更に赤坂は、震災から半年後の東北をどのように過去の歴史と対峙させてるか、復興の方向性と併せて提示している。中央に頼らぬ復興をどのように構築するか、自然エネルギーを地域の自立の支えとして発想する東北人の思いを語っている。

2) 東北への誘い 文人の見た東北像を描いてみる

人も自然も移ろいゆく中、優れた紀行文に永遠に変わらない風土の記憶が眠る。東北学で知られる民俗学者の赤坂憲雄氏が、名紀行のもうひとつの「東北」を案内紹介している²⁴⁾。東北はなお、みちのくであったのかと思う。道の奥に広がる未知のくに。歌枕に彩られた、それ故にロマンをかきたててくれる辺境、そこに暮らす人々。彼らはあれだけの悲慘にじっと耐え続ける。寡黙だ。3.11以後、そんな東北に心打たれ、戸惑い、やがて関心を薄れさせていった人たちは多かつたはずだ。ならば、あらためて未知なる東北へと招待状を認めねばなるまい、と。

i 竜飛岬時空を超えた人の声 太宰治とアラン・ブースは二つの津軽紀行を残している。加藤秀俊は、「旅にはきつと作法がある。」と言った。誰か過去の旅人が残した紀行文を携えて、今そこに赴き、その旅の跡を辿り直す。あらゆる風景が壊れ失われていくこの時代には、それはいつか特権的な旅の作法と化しつつある。アラン・ブースは、太宰の跡を訪ねて、失われていく風景を探しては決して負けてはいない、もう一つの津軽を描いた。

ii 近代化支えた勤勉・善良さ 英国人女性イザベラ・バードの日本奥地紀行を1880年に刊行した。なぜ異邦から来た旅人達は北を目指すのか。18歳の日本人ガイドと人力車・駄馬・徒歩で2200^{km}を旅した。本当

の日本の姿が転がっていたのではないかとバードは信じていた。食べ物を持参せずそれぞれの土地で調達している。奥地は未開や野蛮から遥かに遠かった、善良な日本の原風景があった。

iii 見えない関を越えて 司馬遼太郎の街道を行く「白川・会津のみち」で司馬は「東北は単独ですでに偉大なのである」²⁵⁾と、どこか平衡を失ったかのように書いている。あられもない東北びいきである。東北は、東京では田舎の代表格にされるが上方ではそうではない。「街道をゆく」は、紀行としては、むしろ逸脱している。風景描写は希薄である。ひたすら思索の旅である。

iv 鎮魂と供養のために 岡本太郎の見た日本再発見の旅に収められた岩手紀行には、独特の平泉文化論が語られていた。震災の最中に世界遺産に登録されたが、その半世紀も前に先駆的な文化論を手探りに示していた。「一口に京都文化の移植というが、その華やかさと高度な技術を全面的に取り入れ、末世思想の浄土信仰を引き写しながら、ここでは何と逞しく、彼ら独特の執拗な生命力を表現してしまったことだろう」²⁴⁾と。

v 災間の生に目を凝らす 柳田国男の「雪国の春」昭和3(1928)年には、いくつかの東北紀行が収められている。3.11の震災以後はこの紀行の意味合いが大きく変わった可能性がある。それは明治29(1896)年と昭和8(1933)年の二つの三陸大津波の狭間にいわば「災間」に行われた旅の記録であるからだ。「雪国の春」はもはや牧歌的な読み物ではない²⁴⁾。農政学者としての地域の民俗の調査と津波被害後の「高台移転」の光景に対する現地に住む人々の動静は、村長さんから「そんなこと知って何になさるか」と詰られる。元の屋敷を捨てて高台に上がったものは後悔している。早く悲惨な経験を忘れ「それよりも食うが大事だ」と浜近くに出た者は、漁業にも商売にも得をしている。柳田がひたすら目を凝らしていたのは、生存の苦痛であり災厄や別離への不安であった。「災間」を生きていたのである。

3) 震災後の自然の境界 人間と自然の境界の再考である日本辺境論を展開する。赤坂が被災地を歩き続けて目撃したのは、人間がコンクリートで固めた人為的な境界が、無残に破壊された姿だった。消波用のブロックが海岸から2^{km}、3^{km}内陸に散乱し海辺にある排水施設が軒並み破壊されコンクリートの港は海に沈んだ。

近年以来、日本人は浜辺を埋め立て、海へ海へと進出してきた。その境界にコンクリートの堤防を造ることで、人為的に環境を保ってきた。しかし、今回の大震災でその境界が至る所であっけなく突破された。

驚くことに、津波の被害が及ぶ境界の少し上に、各地で神社やその鳥居と縄文期の貝塚が残っていた。つまり江戸時代までは海だったところを堤防で仕切って住宅や商業施設などを造ってきたことが、被災地を歩いて初めて分かった、という。

4) 東西/南北考²⁴⁾ —いくつもの日本へ⁶⁾

赤坂憲雄の東北に対する思い入れが鋭く東京に対して対峙する。「東西/南北考—いくつもの日本へ—」面白い書き出しは、一つの日本からいくつもの日本へ歴史の見方を改めて考え直してみる。

はじめに、東西から南北に視点を転換することで多様な日本の姿が浮かび上がる。「一つの日本」という歴史認識のほころびを起点に、縄文以来、北海道・東北から奄美・沖縄へと繋がる南北を軸とした「いくつもの日本」の歴史・文化を重層的にたどる。新たな列島の民俗誌を切り拓く、気鋭の民俗学者による意欲的な文化論として映る。

あとがきでは²⁵⁾、今2000年！地域の時代が始まろうとしている。かつては「地方の時代」が声高に叫ばれたことがあった。それは一体何を残したか。何一つ浮かばない。中心と周辺の間では、地方はどれほど歯痒いところで、中央や国家に身ぐるみ絡め取られることを、白日の下に晒すことこそ「地方の時代」はあるのかもしれない。

今必要とされるのは、中央の補完物に過ぎない地方

ではない。遥かに自律的な何者かである。今ここで地域について語ることは、深々とした根拠がある。その地域というものに、歴史的な或いは哲学的な根拠上耐えたい、と思いを巡らしてきた。そのためには試行錯誤の努力が必要と考える。

・・・

地域とは、「一つの日本」が壊れていく現象である。そこには「いくつもの日本」が現れてくる。いくつもの日本を孕んだ地域こそ、逆説的ではあるが、グローバル化の時代に対する抵抗の経典となるものである。

5 地域の魅力・都市の魅力

1) 萩市景観行政の議論の中で 景観審議会に出席して 地域の間人像、武家屋敷や寺院、明治維新の志士の旧宅など江戸時代からの街並みがある。それは何かを探す。萩に来て7年になる。今、山陰・北浦の萩の街、この地域のことを考えてみたい。この船津という町に住むこと、この地域、周防長門の萩という歴史の街を調べて考えてみたい。歴史を見直し考え直し地域の伝統文化や生活技術、歴史風土を中央に影響を受けない歴史上の事実として眺めてみる。この地域の歴史・文化・伝統・民芸として凜とした営みと仕組みをじっくりと味わい新しい歴史的事実を史実に即して見直すことが原点であろう。学問することは、その地域を知ることであり新しい知識の習得にある。地域の方言・地名・民俗・民芸・伝承舞踏などの仕組みや営みや生活文化の中での現状での真の姿をじっくりと鑑賞して調べ体験してみることから始めよう。

2) 萩学 萩市 萩学検定 まちじゅう博物館「街並みに誇り」というが、その実態は何か。世界遺産を守り育てる。子供たちを通して萩の素晴らしさを知って貰うこと。まちじゅう博物館または屋根のない博物館が 2004年萩博物館が出来て、館長高木正熙氏が、過疎化と少子高齢化の中でどうしたら生き残れるか、市民の手で江戸時代から残る都市遺産を守り育てれば奥

の深い観光都市が実現できると考え、民家に残る古文書など文化遺産の保全、市民講座 地域学検定を実施した。

具体的には2004年オープンした萩博物館で「萩学なんでもボックス」を設置した。萩再発見ギャラリーには、萩に関する様々なテーマに沿って資料や模型、解説シートなどが収められている。入場者は箱を取り出して中身を手に楽しみながら学ぶことができる。二十四のテーマがある。藩校明倫館、幕末パンの作り方など、例えば、吉田松陰入門には、塾の建物模型、間取りを示す解説版、松陰像をイメージしながら萩に関する学習ができる。

また、萩市が2005年から町全体を「屋根のない博物館」と見なして新しい観光地づくりを進めるといふ。高木館長曰く、「過疎化と少子化の高齢化の中でどうしたら生き残れるか。」市民の手で江戸時代から残る都市遺産を守り育てれば、奥の深い観光都市が実現できるとの構想でつくられた。博物館はそのバックボーンである萩学を進める中核施設に位置付けられた。

普及に向けてのその他の取り組みは様々である。展示室は資料や模型パネルなどの江戸時代からの歴史や自然環境などを学べる。

出前講義は民家に眠る古文書などの文化思索の保全で小中学校で出前講義をする。

非営利組織NPOはこうした活動を陰で支える。

NPO 萩まちじゅう博物館や元教師や主婦でつくる市内を巡る観光客のガイドは NPO 萩観光ガイド協会が担当する。

以上の手段や方法により、文化遺産の掘り起し市民講座を開設し地域学検定の運営に当たる。

「市民の手で町を守り育てるといふ構想を実践している。将来はNPOが博物館の主体にもなる」もともと「普段の生活の場がそのまま歴史の場にもなっている」萩だけに、博物館の取り組みも加わって地域学に対する市民の関心は高まっている。

例えば、私立を含めた市内にある四十の小中学校の

うち昨年は、二十八校が総合学習になんでもボックスを利用、出前講義も二十三校に。検定用テキストも「市内だけで三千五百部売れた」「五十年後、百年後の子供や、孫に対し町を財産として残したい」高木さんは萩学の普及に走り回る。

3) 地域活動を萩市に適用

これまでの事例を萩学に資するにはどの様に参考に出来るのか。

- i 萩市としての「地域学」を立ち上げ、これを広め深める。市民の心の糧、精神的な柱にしよう。
- ii 小学生に、地域の歴史と伝統と文化を学習する機会をつくり企画し実施に移す。
- iii 歴史・伝統文化の担い手を育成し、地域の宝を伝承し継承していく後継者を育成する。
- iv 観光客・外国人に地域のガイドランスを実習させ、単に見るだけでなく地域の生活を体験して貰う。
- v 地域内の世代を超えた相互交流の場を図る。
- vi 学習の方法と内容は、具体的な対象を企画し調査し、整理し、公表する。
- vii 成果を具体的に、観光客に実践する。DVDや映像などの地域の現実を表現出来る方法を企画し実行する。

主導する組織を、教育委員会 財団法人の選択をする。対象課題を歴史や伝統文化の総合学習の一環として、地域の自然風景や伝統的景観や人工的な都市景観を含める。

小学生の総合的な学習の中で地域の歴史や伝統文化に景観等テーマを考慮した試みをする。

学習の方法：過去の景観賞を地域に分布させた説明を加えて観光ガイドに重用する。

新しい地域の宝の発見などと関連付けて、各地域に住む児童に地域の自然や歴史的風物の姿を四季を通じて観察させて特徴を文章（詩や短文・俳句や和歌など）や絵画に表現させてみる。

家庭での親子や家族の会話や団欒の状況を反映する。町内会や地域での会合の状況を考慮する。コミュニティーの絆を図り伝統的な祭りや企画の歴史や背景を調

べる。広域な萩市の全体像と各地の相互関係を明らかにする。地域的な特色と季節的な変化をどのように表現するか。最終的なこの運動の狙いは、地域の後継者の育成と地域の文化と伝統を伝承する担い手を育成し後継者を育てる礎にすることに他ならない。

4) 山口 歴史、芸術、体験型農業

新たな視点から観光の魅力を再発見し、地域学と地域誌からのアプローチを考える。明治維新以来 150 年、歴史・芸術、体験的農業を考慮した企画がある。

長州藩の存在「萩」風光明媚 秋吉台 好学の気風 吉田松陰、などの実時間観光地として九州とも関わりが深い山口県は、西の響灘、北の日本海、南は瀬戸内海に面し、内陸部にも大鍾乳洞群を擁する秋吉台国定公園をはじめ風光明媚な見どころが広がる。

一方で好学の気風に富み、吉田松陰を筆頭に多くの逸材を生んだ地として名高い。彼らの足跡は県内各所に残り、明治維新 150 年を前に再び注目されている。それらの歴史的資源に加え、近年話題を集めるのが、地域で育まれてきた文化や産業である。新旧の魅力と再発見に満ちた山口の旅に出かけよう。

明治維新 150 年で、日本の近代化を牽引「萩反射炉」「松下村塾」山口は本州最南端に位置し、幾度となく歴史の舞台となった。歴史の歩みを語る上で欠かせないのが長州藩の存在である。明治維新 150 年を迎える 2018 年に向け、歴史的資源を再発信する様々な取り組みが始まっている。

九州・山口の 8 県 11 市による世界遺産登録推進協議会は、各地の産業遺産のユネスコ世界遺産登録を目指して動きを活発化している。県内萩市に 5 つの産業遺産が含まれている。例えば、江戸時代末期に導入された「萩反射炉」。ペリー来航前後の日本では海防強化を目的に、鉄製大砲の自力生産が模索されていた。萩反射炉は国内初の反射炉として操業した佐賀藩の反射炉をもとに設計されたもの。実用炉ではなく試験炉という見方が有力視されているが、近代化への新進性をうかがわせる貴重な足跡と言える。維新の志士を育ん

だ「松下村塾」も産業遺産の一つである。吉田松陰が自宅内に8畳一間の松下村塾を開いたのは26歳の時。伊豆下田での密航企てが失敗に終わり投獄された後、萩の謹慎生活の中で講義を始めた。

日本や古代中国の歴史、兵学について教えたが、松陰が徹底して説いたのは実行の大切さであった。

同塾の特徴は、塾生を身分によらず受け入れ、彼らに対等の友人として付き合うことを指導した点である。机上の学問ばかりでなく、農作業や大工仕事でともに汗を流すことで塾生間に強い絆を築かせたという。

松陰の下で学んだ塾生は90人。その中に、日本初の民兵組織「騎兵隊」を結成した高杉晋作もいる。長州藩から対大国の防衛策を問われた晋作は、騎兵隊の結成を提案し身分を問わず兵士を広く募集した。この視点こそ松陰の教えを受け継ぐものであり、結成された騎兵隊は新しい時代を切り開く要として大いに活躍した。萩市の産業遺産群は、ほか「恵比須ヶ鼻造船所跡」「萩城下町」「大板山たたら製鉄遺跡」。歴史に思いをはせながら散策を楽しみたい。

6 地域の住まいの形式・民家

地域の生活文化の検討課題⁸⁾ 地域に根差した住まいの形をじっくりと見る。民家の姿は、地域の気候風土を長い年月のうちに蓄積した明白な証拠品で重要な記録でもある。住まいの外景は、特に屋根の形は地域の気候環境を直接反映する。勿論、地産池消であるはずだが材料をどのように加工してどのような構法で造るかは、地元の職人の技術の見せ所である。多雨なアジアモンスーン地域では、雨と水仕舞いが重要な機能と構造を規定する。

住民の生業と生活様式から平面計画が創られる。床は、竪穴時代は土間であった。それが板敷になり、座敷ができて上に菰や藁を敷くなど空間の利用用途と機能に従って決まるが基本は、漢字の田の字型である。農業の場合には厩と作業スペースが必要であるが、これを生活空間内に設えるか別棟にするか地域・地方に

よって異なる。土間か板敷きに炉が造られる。重要な生活空間は主屋につくられ副次的な機能は別棟とするが、隣接してつくられる場合が多い。現在の原初的な民家のもっとも古いものが江戸初期ごろの状況を伝えている。工作の道具の発達と構法の工夫や進歩、生活様式の変化や新しい環境や機能の必要性によって時代とともに変容し変化している。地域によって、地域でも業種や階層によっても多様に多岐に民家は変化してきた。民家を見れば、地域の生活様式の変化を知ることができる。地域史の重要な有形資産である。

1) 気候風土と自然条件

気候風土 高温多湿を生活の中でどう防ぎ凌ぐか、自然、気候、地形、生態を相手に人間が生きていくための原始的な対処方法からローテクを使い知恵と工夫で道具を発明し種々の構法を考えだして多様にリスクに対応する術を考案してきた。アジアモンスーン地域は高温多雨多湿で竪穴式から高床式に早期に転換したと思われる。

敷地の周辺を土壁で囲い、建物は急勾配の屋根とあまり窓などの開口部は取らず、生活に必要な機能の最小限の空間を囲ったと思われる。

2) 住まいの構造形態¹⁾ 町家と農家では立地条件が違う。町家は通常地割の関係で間口が狭く奥行きが長い形態を余儀なくされるが、農家は居住空間の主屋や副次的な建物も比較的敷地を広く採れる。従って構造形態が細長い箱型か複数の矩形の組み合わせ的な形態として考えられる。屋根の形態も基本となる平面形に対応して、適当な勾配をもって葺き材があつて茅葺か板葺で母屋と庇部分が別々に掛けられる。

農家の構造は、大別して三つのタイプがある。飛騨地方に良く見られる合掌造りである。梁の両側に合掌を立て、三角形を形成して屋根をつくる。次に古いのは、梁の上に束を立て棟木を支える方法で、棟木と軒桁の間に垂木を架けて屋根を形作る。三つ目は和小屋である。梁の上に多くの束を立て母屋や棟木を支える。束同志を貫で繋ぐので、屋根裏を見上げると幾何学的

である。

3) 住環境の空間構成 温度変化に対する対応と室内換気の問題がある。換気は、二点間の温度差をつくり、風を人工的に作れば空気の対流が発生して通風できる。出来る限り伝統的な自然環境を取り入れた住居構造を採用することが肝要である。つまり、住空間の構造的な工夫であれば、日射や日照を利用した庇と縁側を活用する。断熱や温度変化に対しての対策としては、屋根構造と基礎構造に外壁が重要な働きをする。

歴史的伝統的な日本の民家は地域の自然環境に順応して色々な工夫がされてきた。京の町家は、自然と生活が調和した職住一体の生活空間を創出してきた。

環境を考える中で水の扱いもまた重要な要素である。湧水の利用や井戸、打ち水など。

4) 人間の生活単位 世帯構成 江戸時代までの産業構造は第一次産業としての農業・漁業・林業に商工業が都市部にあった。生活単位として大家族がすなわち三世代が同居する場合が通常的生活単位と考えられた。二次大戦後、産業構造の変化とともに核家族化が進展し、両親と子ども2,3人が標準世帯と考えられるようになった。さらに最近では状況が変化し晩婚化と少子化と高齢化が一般的生活単位を小規模化して単身世帯が多く、大家族が住むような生活空間の必要性はなくなり地方には昔の大きな家屋敷が残存するが、都市部ではワンルームの住宅が需要に込えている。

5) 衣食住 ライフデザインの基本 四季の住まいの変化にたして、微妙な変化を衣食住に反映している。着るものは、衣替えをし、暑ければ着ないか薄着をする、寒ければ厚着をする。

食に関する住まいとの関係 1日3回料理をする空間と食するスペースが必要である。住まいは、職住を分離するか同じにするかで全体的な構造と機能分離が必要である。

生活空間内の機能に関しては地域や時代によって多様な変化があったが近年、地域的な変化は少なくなり寒暖や気候の違いなどをローテクないしは電機や機械

に依存する部分が多くなり自然的な気候の変化には対応が比較的単純になったともいえる。

7 文化財の防災と保存

文化財は地域の重要な歴史的遺産である。ここでは三つの課題について若干の考察をする。即ち、文化財の防災、文化財の保存、文化財の居場所である。

萩市は、文化財の保存と修復に関してどのように実践的対処をしていく体制があるのか、その考え方の背景と対策の方向性を考えるための準備でもある。

1) 地域の文化財を災害から守る

地域の文化財を災害からどう防ぐか、文化財と防災の専門家がその知識や情報を現実の防災にどのように生かし活用することができるか。現実には、行政がその間にあって努力している。地域で考える防災として、地域の住民や行政と協力して災害から文化財をどう防ぐかを考える。「死の谷」¹⁷⁾を越える橋をどのようにして架けるかその具体策を検討しよう。それには教育が重要なカギではないか。

i 小学校から高等学校まで学校教育の中で、地域にある文化財の存在とその歴史的・伝統的・地域文化の意味を解説し、特に保存や維持管理と災害に対する対応を含めて、内容の理解と伝承について教える。

ii 文化財や国宝など災害に遭わなくとも時間の経過により経年変化や劣化が進行する。それを補修し修理し改修する技術者の教育・継承者の教育をする必要があるのではないか。その体制を整備する。

iii 建設投資に対する維持管理や補修改修の比率は、日本は大体1割程度だが欧州諸国は5割から7割を割いている。日本は「木の文化」、ヨーロッパは「石の文化」と言われるが、欧州では、日常の建設活動の中で既存の事物に対して維持管理する習慣があり、その専門家の養成が行われているのではないか。

国民全体の文化財に対する関心を喚起して、日常性、非日常性の災害やリスクに対して理解と協力を得るには、子供の時から教育を通じて民族と先達の残した遺

産を継承する意味を理解し、それらを支える専門家を養成しその保存技術を継承していく教育が必要である。学校教育とともに地域に生活する住民も文化財の存在を自覚し、住民が学校と行政と一体となって地域で協力するコミュニティーの育成が総体的に重要な役割を演じる。文化財を災害やリスクから守るには地域住民が一体となって協力できる体制が、重要である。

2) 文化財の居場所¹²⁾

昨年、長崎県の対馬で盗まれ、韓国に持ち込まれた2体の仏像の返還問題が長期化している。「当然返すべきだとする日本に対し、韓国メディアなどは、「14世紀に倭寇が韓国の寺から奪ったものだ」と主張する。両国のナショナリズムを刺激する問題となっているが、どのように考え、対処したらよいのだろう。国際的に難しい問題を含んでいる。

単なるナショナリズムや国威の問題に矮小化してはいけない。文化財は人類共通の財産でもある。現在歴史的な過去の植民地時代の遺産を先進各国は持ち続けているが解決の糸口は明確には示されていない。戦争を契機に文化財が破壊されたり強制的に移動されたり奪取されたりした結果、元々あった場所から移動されそれが理由づけされたまま放置されて返還を求める国際的な取り決めがあるが機能するかどうか難しい。

3) 文化財の保存技術を公開伝授¹⁵⁾

小学生が文化財保存の体験技術の伝承に役立つか
“匠になっちゃった”、という試みが行われている。
飾り金具の細工、木材のカンナ削り、畳の縁つけ—文化財の保存に活かされる伝統技術を小学生が体験した。京都古文化保存協会、文友会、朝日新聞社などが主催した「京都 匠の技を学ぼう」という企画が2013年7月20日東京で開催された。夏休み中の親子310人が参加。普段目にすることのない職人の技に目を輝かせた。隣接会場では、「文化財ドック」も開催。古文書や仏像などの所有者が保存や修理の方法について、文友会の専門家のアドバイスを受けた。文化財保存技術の後継者の育成と伝承に対する一つの重要な試みである。

8 方言の存在意義

1) アイヌ 沖縄

東北弁²⁶⁾ 方言を喋ることが恥ずかしさから隠したかったが、現状への変化を見ると、国民の方言への偏見が、IT時代でテレビドラマが介在して日本人の意識を均一化国際化している。惜しむらくは、各地の方言に潜む歴史的な遺産が時代とともに埋没していくことを恐れる。古代における日本列島の辺境の地、蝦夷、隼人、琉球などに残る方言や地名にその時代に活躍した地域住民の姿が歴史の貴重な資料として残存している。方言に隠された地域の過去の遺産であるが、惜しい歴史的な遺産資料が失われつつある。

山口弁は明治維新後陸軍の主導権を持った藩出身の幹部が軍隊用語として「・・・であります」調の表現が窺える。長州人による日本の政治経済面に加えて、文化面でも民生面に関して特に言葉、方言の役割についての考察も地域史の考察には重要である。

2) 地名と意味

古代の蝦夷系の民俗や文化とは、一体何か。それは全く根絶されたのか。それとも見えにくい形で現代の民俗の中に残存しているのか。ともあれ、一つの東北を根底から揺さぶる、誰もが認めざるを得ない唯一の例外は、東北北部に残されたアイヌ語地名である。本州北部の蝦夷は今のアイヌと少なくとも同一種族であったという。地名において、津軽海峡は境界の役目を果していない、ということになる。もっとも確実な尺度は、ナイ（内）とベツ（別）という語の付く地名である。青森・秋田・岩手にはかなり保存されているが、宮城・山形に入るとにわか姿をけし白河の関を超えると、殆ど見いだされない。このアイヌ語地名研究は信頼に値するものとされてきた。

3) マタギの山言葉に見えるアイヌ語

二つの異なった民族の遭遇の現場では、大抵の場合、先住民族の言語は新しい民族の言語によって置き換えられ、跡形もなく消えてしまうらしい。ところが、道具の名称や地名には、先住民族の言語が残存すること

がある、という。大野晋が「日本語の起源」の中で指摘しているのは、ヨーロッパの各地でそうした例があることが知られている、という。

アイヌ語地名はやはり、ヤマト王権によって征服された、先住民族によって蝦夷が残した記憶のかけらなのだろうか、いや、少なくとも今一つだけ確かな痕跡がある。東北のマタギや狩人の使う山言葉がある。その中にアイヌ語が含まれているのである。山言葉の一つ、犬を意味するセタが、蝦夷語つまりアイヌ語であること、山言葉の中に身を潜めているアイヌ語を、鋭敏にも聞き分けることができたのである。これに関しても、金田一京助が「山間のアイヌ語」のなかで、多くの事例とともに論じている。

アイヌ語を含んだマタギの山言葉は、いわゆる北奥方言の地帯に分布が見られる。アイヌの血が比較的優勢であった特殊な地域である。

以上の方言に関する民俗学的考察は、方言の中に現在では存在しない地域に生活した民族の昔の痕跡が潜在的に残存されている可能性があることを指摘しておきたい。これから、地域の風習や慣習・祭事・民謡・伝承の中に昔の生活の姿の片鱗を知る手掛かりが埋め込まれているだろうと推定できる。

[引用・参考文献]

- 1) 今和次郎；日本の民家,岩波書店,2008
- 2) 東野治之；木簡が語る日本の古代,岩波書店,1980
- 3) 網野善彦；日本中世の民衆像—平民と職人—,岩波書店,2001
- 4) 内田 樹；日本辺境論,新潮社,2008
- 5) 森 浩一,網野善彦；日本史の挑戦「関東学」の創造を目指して,筑摩書房,2003
- 6) 赤坂憲雄；東西/南北考—いくつもの日本—,岩波書店,2000
- 7) 網野善彦；日本の歴史をよみなおす (全),筑摩書房,2010
- 8) 平井 聖；図説日本住宅の歴史,学芸出版社,2000
- 9) 森 浩一；地域学のすすめ,—考古学からのすすめ—,岩波書店,2002
- 10) 中島孝信；経済学から見た伝統文,経済教室,日本経済新聞,2013.4.29
- 11) 梅棹忠夫；文明の生態史観,中央公論社,2009
- 12) 和辻哲郎；風土人間学的考察,岩波書店,1985
- 13) 奥村 弘；地域で歴史文化の担い手,神戸大学地域連携センター,2008
- 14) 文化財の居場所；朝日 2013.10.12
- 15) 文化財の保存技術を公開伝授,朝日 2013.8.1
- 16) 学；夕&EYE 小中学校に「地域学」日経 2008.2.22
- 17) 土岐憲三；私の視点「死の谷」,朝日,期日不詳
- 18) 朝日記事；「匠になっちゃった」朝日 2013.8.1
- 19) 萩市景観審議会議事録、平成 25 年 9 月 17 日
- 20) 広角鋭角；地域学を広げる,日経 2008.3.17
- 21) 石川 匠；九州という思想、朝日 2008.1.21
- 22) 赤坂憲雄；東北学“各論”熱く,朝日,2001.2.1
- 23) 赤坂憲雄；人と自然の境界再考を、朝日 2013.2.6
- 24) 新藤健一；東北弁,朝日、期日不詳
- 25) 地域貢献度調査；日経 2012.11.19.
- 26) 木田滋夫；大学の地域貢献,読売 2007.9.4

Some Introductory Discussions of Regional History in San-in District -In Memory of Local Historical Heritages-

TAGA Naotsune

abstract : Recently, some newly attainments of guidance to try to describe the localized historical interpretation in traditional culture, regional attainments, residential houses have been published as the local histories in individual regional areas from new information collecting ancient old history and recording documents. Such a trial work and result on the point of view, the way of thinking, and the way of method, will be supplied much pleasure to regional people in much content and will be very much effective in order to make limited the local area more active. The purpose of these trial to wonderful and interesting content of regional histories in localized districts in Japan from ancient age to recent days. There was already ultra-modern trial and attainment the special typical and leading examples of new regional historical information assembly in Tohoku district and some other local area. Usually, the fundamental textbook on Japanese history is normally described as the main points of political, economic and artistic aspects of national events. However, the localized human beings and life works are not contained in the detailed regional human events and happenings. Now a day, the aging society and few children are pointed out to restrict regional district in few populated area in Japan, important issue is to make a local area more active. One of necessary important works is to write down about historical contents and happenings, traditional local festival and local song and dancing and human heritages. The recent local human actions and attainments will be continued to communicate to followers. From now on, the above sayings and content writings will be discussed.